京極読書新聞 ＜第55号＞

発行日　平成26年 4月10日(木)
京極町生涯学習センター湧学館

山麓文学館2

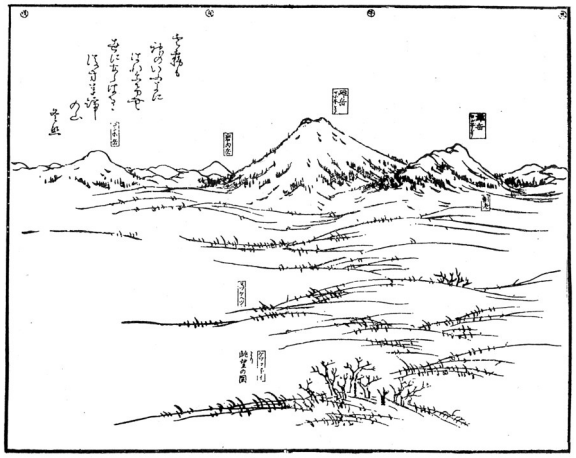
毎月第２金曜日 夜７時～８時／湧学館 読書室にて

今年度の読書会「山麓文学館２」の構成は、平成２６年２月２０日、倶知安風土館で行われたブックトーク「文芸作品にそびえる羊蹄山」がベースになっています。その時に参加された皆さんの反応や質問を基に、５月～９月の全５回の鑑賞作品を選びました。

第１回の時には「文芸作品にそびえる羊蹄山」のミニ・ブックトークを行います。昨年度の「山麓文学館」に参加されなかった人たちにも、今年度の読書作品へのつながりがわかるよう丁寧な解説につとめます。以下、今年度作品の紹介です。（湧学館／新谷保人）

５／１６（金）第１回 ＜喜茂別・京極＞
松浦武四郎著/丸山道子訳「後方羊蹄日誌」

江戸時代、北海道（当時は蝦夷地と呼ばれていた）・樺太の地をくまなく歩きまわった松浦武四郎。数多く残された彼の踏査記録の中でも、「後方羊蹄（しりべし）日誌」は抜群の面白さです。道案内のアイヌの人たちと羊蹄山をめざし、雪中にビバークし、熊と闘い、脇方を通って札幌方面へ抜ける武四郎。歌を詠み、漢詩を木に書きつけ、アイヌの人たちと楽しく語らう武四郎。こんな痛快な日本人が１５０年も昔にこの京極の地を通って行ったなんて、まるで夢のよう。



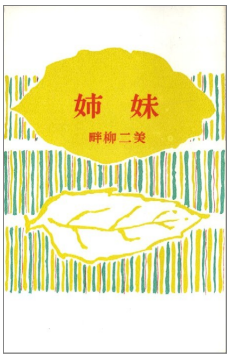
ケツフネイより羊蹄山を望む

「後方羊蹄日誌」より。有珠方面から羊蹄山を臨んだ図。この絵の中に、今年度の「バスの旅」（１０月１１日）コースのヒントが隠されています。

６／１３（金）第２回 ＜ニセコ＞
畔柳二美「姉妹」

「姉妹」と書いて、「きょうだい」と読みます。作家・畔柳二美（くろやなぎ・ふみ）の昭和３０年の作品。子ども時代のニセコの町が描かれ、日本中で大好評を博しました。当然、映画化されました。こちらも、野添ひとみ、中原ひとみ「姉妹」の愛らしさ爆発で大ヒット。今でもこの映画を記憶している年輩の方は数多いのです。６月１３日は、この映画鑑賞も行います。したがって、この日の読書会だけは午後６時スタート。

(独立映画,1955年)



(大日本雄弁会講談社,1955.5)

▼ ２ページ目に続きます

京極読書新聞は
毎月1日発行です。

７／１１（金）第３回 ＜倶知安＞
林芙美子「田園日記」

林芙美子。昭和５年に「放浪記」を出版。その売り上げは６０万部のベストセラーとなりました。当時の６０万部は、今なら村上春樹クラスの驚異的なベストセラーでしょうか。経済的な余裕ができた彼女は積極的に取材活動を行いはじめます。そして、昭和９年５月、彼女は初めて北海道の地に。

この時の動きがとても面白いのです。５月２０日に東京を発った彼女は、盛岡、青森を経て２５日に青函連絡船で函館に到着。「えっ！」と思うのは、そこからです。なんと、彼女は函館をそのまま通過して、その日のうちに倶知安へ入るのです。なぜ、倶知安？ 倶知安には何があるの？

この第３回では、半月湖や倶知安の街が登場する「田園日記」を読みますが、同時に、この昭和９年の林芙美子の不思議な北海道の旅をたどってみる予定です。

８／８（金）第４回 ＜倶知安・京極＞
鈴木實「近代農業の先駆け 鈴木重慶伝」

ブックトーク「文芸作品にそびえる羊蹄山」の中で、大きな反響を呼んだのがこの一枚の写真です。頂上にまだ雪が残る羊蹄山の麓、東倶知安村（現在の京極町）目名の原野を走るトラクター。そして、トラクターを運転しているのは鈴木農場の農主・鈴木重慶。大正１３年。まだ有島武郎「カインの末裔」のような世界が生きている中での、この一枚はとてつもない衝撃ではありました。

「鈴木重慶」について書かれている本はないのか？という問い合わせが何人もの人から寄せられ、探し出したのがこの「鈴木重慶伝」です。文章はちょっと硬いけれど、中に掲載されている写真のどれもが凄い。

９／１２（金）第５回 ＜京極＞
峯崎ひさみ「（作品未定）」

京極に暮らす私たちにとっては、峯崎ひさみさんは「北の沢」物語の作家というイメージが強いのですが、実際には、「北の沢」以外の作品も多く書かれています。「北の沢」物語の新作を…という想いもある反面、いつか、どこかで、「北の沢」ではない峯崎さんの未知の世界を見てみたいという想いもあるのです。まだ迷っています。

９月まではまだ今少し時間はありますので、「山麓文学館２」読書会が動き出してから、会の皆さんのご意見などを聞いてベストの選択をしようと考えています。羊蹄山の麓には、私たちが出会ったことのない素晴らしい作品がまだまだ眠っているのです。

京極出土の「国策紙芝居」がとりもった記念講演ふたつ

今年の３月２６日、湧学館で、後志管内の図書館の集まりがあり、そこで二つの記念講演が行われました。まず、一人目が倶知安風土館の館長・岡崎毅氏。そして、午後から会場を視聴覚ホールに移して、児童文化研究者の谷暎子氏。どちらも、平成２５年の後志図書館界を象徴するかのような大発見「国策紙芝居」を介して知り合うことになったお二人です。

【事例報告】
袖珍文庫・国策紙芝居から見えてくる地域
（湧学館・新谷保人）

最初に、湧学館から、昨年５月に「国策紙芝居」が発見されてから今日の講演会に至るまでの経過をご説明しました。紙芝居を実際に人々の前で上演し、解説する…という、従来の博物館的手法には見られない展開を果たした京極出土の「国策紙芝居」。

博物館も文学館もない小さな町が、どうやって地域資料を守って行かなければならないか、試行錯誤を繰り返した結果が今日の記念講演に結びついたと私たちは考えます。これからも、羊蹄山麓のさまざまな施設や人がそれぞれの良さを出し合って郷土の知的財産を守り活用して行く必要を訴えました。

【講演Ⅰ】
「歴史講座」実施の経緯と目的
（倶知安風土館館長・岡崎毅氏）

岡崎氏からは、平成２６年１～３月に倶知安風土館で３回にわたって行われた連続講座の反響・意義が語られました。やはり、人間が声を出して、紙芝居が紙芝居として目の前で行われる説得力や迫力に多くの方が驚かれたようです。

さらに、岡崎氏は、「博物館」の意味・価値という部分をもやさしく解説してくれました。調査・研究から情報発信まで、博物館が持つ機能は多岐にわたっていますが、その中でも、博物館が独自に持っている機能「収蔵・保管」にふれられ、博物館が「モノ（収蔵品）」に対する時の、徹底した合理主義や唯物論の考え方を解説してくれました。この科学的態度だけが、「モノ」の意味を正しく伝えうるのだという証明として、当日、岡崎氏は風土館収蔵品のひとつ「木鉢」を持参されました。

この「木鉢」には「明治時代、津軽海峡を越えて北海道・倶知安に嫁ぐことになった女性が、唯一、持たせられた嫁入り道具」という博物館情報が付いている。そのことによって、この「木鉢」は、単なる民家の物置に眠っている「木鉢」ではなく、倶知安風土館の収蔵品「木鉢」なのだという説明は、私たち図書館人にもさまざまなヒントを与えてくれます。図書館でいえば、それは「蔵書」ということになるのでしょうか。図書館にある一冊一冊の本に、意味や価値が存在している…ということを別の角度から教えてくれた、たいへん意味深い講演でした。

◀ 倶知安風土館館長・岡崎毅氏

3ページ目「京極出土の「国策紙芝居」がとりもった記念講演ふたつ」の続きです

【講演Ⅱ】
「次代に伝えたい北海道の児童文化資料
―北海道・児童出版物の探索と研究から―」
（児童文化研究者・谷暎子氏）

谷暎子氏は、京極町民にとっては「国策紙芝居の研究者」といったイメージが強いのですが、それは正しい谷先生の実像ではありません。もっと大きいのです。日本の、そして北海道の児童文化の流れを、明治時代から現代まで、戦時期・占領期を含めて語れる日本でも数少ない研究者なのです。いつか、どこかの場で、先生の研究成果を余すところなくお話しいただけたらと思っていましたが、ようやくここに実現しました。この大きな視座の中で、今回の京極出土「国策紙芝居」がどこに位置するのかも教えていただき、まさに、この慌ただしかった平成２５年度の最後を締める記念講演となりました。

残念ながら、この日の講演の全容を伝えるには、この「京極読書新聞」ではスペースが狭すぎます。しかし、湧学館では谷先生の主要著作はすべて所蔵していますので、興味を持たれた方は湧学館の書架に足を運んでみてください。

明治４３年、倶知安で出版された児童雑誌「後志学の友（しりべし まなびのとも）」。
明治４２年旭川で出版された「北海の少年」に続く、北海道最古の児童雑誌です。
谷先生の講演には、このような貴重映像が目白押し。

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101　京町字京極158番地1
TEL　0136-42-2700（代表）
FAX　0136-42-2032
E-Mail　yugakukan@town-kyogoku.jp

ホームページもご覧ください
http://lib-kyogoku.cubet.com/